

夏の終わりの学会から Content-based teaching (内容重視の英語授業) の落とし穴

東條 加寿子

リオオリンピックとともに8月が終わり、9月に入りました。猛暑はまだ続いています。不思議なことに、9月に入ると空気のどこかに秋が感じられるようになります。北は北海道、札幌の空気であればなおさらです。そんな9月のはじめに参加した学会から、英語教育に対する示唆を拾い上げてみたいと思います。

参加した学会は大学英語教育学会。大学における英語教育が主領域ですが、常に英語教育の本質にかかわる多くの議論が繰り広げられます。特に今年は、次期学習指導要領を視野に、小学校から大学までの英語教育を「アクティブ・ラーニング」が席卷している感がありました。OECDが世界41の国と地域に対して実施しているPISA(生徒の学習達成度テスト)で日本は読解力、数学的リテラシーおよび科学的リテラシーについていずれもトップレベルにある一方で、高校生の英語力については、CERF(ヨーロッパ共通参照枠)のAレベル程度と言われています。ちなみに、CEFRでは英語運用能力を大きくA(基礎段階の言語使用者)、B(自立した言語使用者)、C(熟達した言語使用者)の三レベル群に分け、さらにそれぞれの段階を2つに細分化して、A1、A2、B1、B2、C1、C2の6レベルに分類しています。欧州では高校・大学で「自立した言語使用者」のBレベルが該当するといわれ、日本のレベルを大きく上回っています。次期学習指導要領がアクティブ・ラーニングを旗印に英語力の向上を目指すものとなっているのはいうまでもありません。

さて、学会の基調講演では示唆に富むさまざまな提案がなされました。そのうちの一つの講演は語学教育におけるcontent-based teaching(内容重視の語学教育)の妥当性を問い直すものでした。”Language is best learned when integrated with meaningful context.”をどう捉えるべきか。実証的に考察するために、多くの先行研究が紹介されました。語彙や文構造などのmetalinguistic instructionとコンテンツ焦点化との均衡はどうあるべきなのか。文法は明示的(explicit)に教えるべきなのか、伏線として(implicit)学び取らせるのか。文法は教授者が計画的(planned)に教えるべきなのか、コンテンツを学ぶ過程で偶発的(incidental)に学びとるものなのかが検証されました。

その結果、学習者の言語能力がある程度のレベルに達していて、meaning（意味）と form（文法）との関連性を理解できることが一つの閾値になることが分かった、との趣旨が述べられました。コンテンツに焦点を当てた英語教育、いわゆる英語で学び、その副産物として英語力をつけるという content-based teaching は、学習者のある程度の英語力を前提にしており、学習者がこのレベルに達していない場合には内容重視の英語授業は必ずしも効果をもたらすとは言えないため注意が必要、と解釈できるのではないのでしょうか。

学習者が主体的・能動的に学べるように、同時に英語力が現状より格段にアップするようにと掲げられたアクティブ・ラーニング。Implicit で incidental な性質を本来的に内包しているアクティブ・ラーニングで確実に教育効果を高めるためには、英語教育研究からの知見をカリキュラム編成や授業計画に反映させることが有用です。

（とうじょう かずこ 教授／教員養成センター）
